

Title	ウマイヤ朝後期における政治的変遷の特殊性について
Sub Title	Some aspects of the political history of the later Umayyads
Author	黒田, 寿郎(Kuroda, Toshio)
Publisher	三田史学会
Publication year	1967
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.40, No.2/3 (1967. 11) ,p.309(471)- 329(491)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	松本信廣先生古稀記念
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19671100-0313

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ウマイヤ朝後期における

政治的変遷の特殊性について

黒田寿郎

一、ウマイヤ朝後期の位置

ウマイヤ朝後期、つまり同朝七代カリフ、スライマーンの即位（回教曆九十六年、西曆七百十五年）から同朝の没落（回教曆百三十二年、西曆七百五十年）に至る期間は、アラブ世界、もしくはイスラーム世界の分極化の時代⁽¹⁾といふことができるだろう。ムハンマドの出現によつて、初めて成就されたイスラームによるアラブ統一は、その余勢をかつて中東の地を中心に巨大な帝国を作りあげた。そしてこの帝国の統一は、多少の躓きはあつたにせよ、少くともウマイヤ朝前期までは十分に保たれていたのである。もちろんムハンマドの死の直後にこの統一を脅やかした激しい背教^{リッヅ}の動き、三代目正統カリフ、ウスマーンの殺害、正統四代カリフ、アリーとウマイヤ朝創始者ムアーウィヤとの抗争等々といつた否定的な事件はあつた。しかしカリフを中心とするイスラーム帝国の統一は、この時まで揺ぎなく確保されてきたのである。だがウマイヤ朝後期にいたるや、この統一は徐々に破綻をきたすことになるのだ。

こうした破綻の種子は、元来ウマイヤ朝の建設そのものうちにあつた。シッフィーンの戦い以後の、ムアーウィヤの巧妙な政策も、その本質上、帝国内の人心を掌握しきるていものものではなかつたのだ。特にアリーを擁護したイラクの

民の反感は根強く存在しつづけ、ついにウマイヤ朝没落の最も重要な原因の一つとなるのである。⁽²⁾「ウマイヤ家の者がカリフの地位につく何等の理由もなく、家系がクライシュ族の裔であること以外には、彼等とカリフ職の間には何の関係もないのだ⁽³⁾」というアルマクリージの言葉は、当時の不満分子の意見を端的に表しているであろう。「ムアーウィヤは最後のイスラーム改宗者で、彼の父(アブー・スフヤーン)は「反ムハンマド派の」領袖であり、ムアーウィヤはカリフの地位につくさいに、協議^{シユラー}の制度さえも無視しているのだ⁽⁴⁾」という非難の声は、最も痛烈にウマイヤ朝の急所をついているのである。

ムアーウィヤの経歴はさることながら、協議^{シユラー}の制度の無視は、多くの人々の反感をかきたてるに十分だった。例えばイラクにおいては、ムアーウィヤをカリフとして認められた者の数は極く僅かであった。しかも彼等をムアーウィヤ承諾に導く論拠は、純粹に宗教法的なものだったのである。現世の事柄はたゞ一人のイマームに委ねられねばならない。「イマーム職こそは、宗教社会の基礎を作る根本のものであり、これあつて初めて人々の福祉が確保され、すべての事柄が確立されるのである。⁽⁵⁾」このような宗教法的観点からムアーウィヤに忠誠の誓いを行なつた者も、次第に彼の政治的偏向に眼覚めざるをえないことになるのだ。アフマド・アミーンのように、ウマイヤ朝の政治は、そもそもの初めから「アラブの政治ではなく、ウマイヤ家の政治⁽⁶⁾」といった色彩が濃かつたのである。ムアーウィヤが協議^{シユラー}の制度を無視し、武力を用いてカリフの地位をかちとつたことが、まずこの最たる例としてあげられるであろう。⁽⁷⁾

アフマド・アミーンのように、協議^{シユラー}の制度に関しては、残念ながらその方法、人選、決定事項の規制力等々について明白な規定がない。⁽⁸⁾とはいえこの制度は、クルアーン「協議の章」第三十六節(wa 'amruhum shūrā bainahum... 何ごとともよく協議し合い...)等に明らかに規定されているのであり、正統四代カリフまで一応遵守されてきたものなのである。もちろん先にのべたように厳密な規定こそなかつたが、それまで人々は不文律としてこの協議^{シユラー}を重要視してきた。

しかしこの規定もムアーウィヤ以降完全に無視されてしまうのである。イスラーム帝国内において、協議の制度は、もちろん十分なものとはいえないにせよ、民意のいわゆる民主的反映を実現しうる重要な制度であつた。⁽⁹⁾これが無視され、事実上廃止された場合の人々の反感は容易に推察しうるであらう。ここでは、宗教法にのつとつてムアーウィヤをカリフとして認めたものが、宗教法にのつとつて彼を非難せざるをえない事態が生じていたのである。それまでの格調高い、宗教的政治はかげをひそめ、カリフ職は一段と現世的なものへと引き下げられてしまつたのだ。事実ムアーウィヤは、意味深長な言葉を吐いているのである。曰く「私は最初の王である」、⁽¹⁰⁾と。

神権政治から権力政治への推移のもう一つの特長は、これも協議無視の上に成り立つ、カリフ世襲制の問題であらう。⁽¹¹⁾イスラーム帝国破綻の一原因として、ウマイヤ朝の協議無視をあげうるならば、それと同程度の重要性をもつものとして、われわれはこの世襲制をあげるので。ムアーウィヤが実子ヤジードにカリフ職を譲渡する旨公表したとき、人々はウマイヤ朝の世俗的、王権的性格をまざまざと見せつけられてしまつたのである。⁽¹²⁾これにたいする不満は、直言、皮肉等々のかたちで多くの史書に記録されているのだ。⁽¹³⁾H・I・ハッサンはいつている。「ムアーウィヤが実子ヤジードを後任に任命したとき、世襲制が姿を現わし、イスラーム帝国の政治体制は、正統四代カリフ時代のそれからウマイヤ朝特有のそれへと、つまり協議の制度、^{シユラー}宗教に依存する体制から、世襲制により、政治優先、宗教は二の次というそれに変つたのである」。⁽¹⁴⁾

政治が世俗化するにつれて、本来宗教的な国家であるイスラーム帝国は、数多くの宗教的分派による内訌、つまりウマイヤ朝にたいする反対派の執拗な叛乱という悲劇に、当然見まわれることとなつた。しかし支配王朝の権力が十分強力な場合、こうした危機回避はまだ可能だつた。例えばイラクの大守アルハッジャージュ・ブン・ユースフに代表されるよ

うな、強力な権勢が王朝のもとにある場合、一応表面上の統制を保つことができた。しかしこうした強硬策の中に、この王朝がその後に辿る経過がすでに明確に定められていたのである。人々はアルハッジャージュを「悪徳、専断、殺戮、暴虐、虚偽の徒」⁽¹⁵⁾と悪しざまにいいながら、彼にたいする、ひいてはウマイヤ朝カリフにたいする敵意を、ひそかに燃やしつづけていたのだ。何故ならば、「イラクの民のよからぬ噂が聞こえる。彼等の許に赴き、奴等を葬つてしまえ」⁽¹⁶⁾、と命を下しているのは、他ならぬカリフのアブドゥルマリクだつたのだから。

政治の世俗化は容易に意見の対立を産み、激しい対立はイスラーム世界の分極化に一層の拍車をかけることとなつた。だが、われわれはこの分極化の一番の原因となつたもの、つまりウマイヤ朝退勢のきっかけを作り、彼等の首を締めつけたものが、彼等自ら選んだカリフ職世襲制にあることに留意すべきだろう。世襲制とはいうものの、アラブ世界における婚姻関係の複雑さは周知の如くである。それ故この制度は、時代が下るにつれ、カリフ職獲得をめぐるウマイヤ朝の者同志の間に強い敵意、憎悪を植えつけ、そうした反感が例えば將軍、宰相達にも及んで結局この王朝を滅してしまうことになるのだ。⁽¹⁷⁾要するに政治の一要素の世俗化は他の世俗化を産み、ついにはイスラーム世界を分極化し、その統一を決定的に乱すという悪果を齎すことになるのである。後期ウマイヤ朝の歴史において、われわれはこの分極作用がある時は緩慢に、ある時は急激に進行するさまを明確に看取することができるのだ。

ウマイヤ朝が潰えさつたのちも、アッバース朝がイスラーム世界の統一を実現することができた。だがその最盛期においても、後者はスペイン・ウマイヤ朝を傘下に入れることができなかったし、とりわけその政治的体質がウマイヤ朝のそれとは決定的に異つてしまつたのである。P・K・ヒッティはいみじくもいつている。「アッバース朝は、アラブが構成諸民族の一つでしかないネオ・ムスリムの帝国であつた」⁽¹⁸⁾（傍点筆者）一たび強力な分極作用に見舞われた帝国が、完全に旧来の如く回復するなどということは、所詮願うべくもないことなのだ。

註

- (1) J. Wellhausen, "Arab Kingdom and its Fall" tr. by M. G. Weir, p. 261.
- (2) A. H. al-Kharbūṭālī, "Ta'rikh-l-irāq fi zill-l-ḥukm-l-'umawi" 参照。
- (3) Al-Maqrīzī, "An-nizā'u wa-t-takhāḍum bani 'Umayyah wa bani Hāshim" p. 13.
- (4) Ibn Qutaibah, "Al-'imāmah wa-s-siyāsah" vol. 1, p. p. 132~3.
- (5) Al-Māwardī, "Al-'ahkām-s-sulṭānīyah" p. 3.
- (6) 'Ahmad 'Amin, "Fajr-l-islām" p. 254.
- (7) 'Abu-l-Fidā, "Al-mukhtaṣar" vol. 1, p. 186.
- (8) 'Ahmad 'Amin, op. cit. p. 240.
- (9) M. Y. Mūsā, "Niẓām-l-ḥukm fi-l-islām" pp. 113~121.
- (10) Al-Ya'qūbī, "At-ta'rikh" vol. 2, p. 232.
- (11) 註へば E. Tyan, "Le Califat" vol. 1 参照。
- (12) Al-Jahīz, "Risalah fi Mu'āwīyah wa-l-'Umayyīn" p. 16.
- (13) Ibn Qutaibah, op. cit. vol. 1, p. 189.
- (14) H. I. Ḥassan, "Ta'rikh-l-islām" vol. 1, p. 437.
- (15) Al-Jahshiyārī, "Kitāb-l-wuzarā' wa-l-kuttāb" p. 42.
- (16) Ibn Qutaibah, op. cit. vol. 2, p. 31.
- (17) H. I. Ḥassan, op. cit. vol. 1, p. 438.
- (18) P. K. Hitti, "History of the Arabs" p. 280.

二、分極化の方式

ヴェルハウゼンの用語を借りてわれわれは、ウマイヤ朝を分極化の時代と名付けた。予言者ムハンマドは、アラブの胸中に巢喰う古くからの部族的な連帯感情アサビリーヤにたいして宗教的な征服を行ない、その結果彼等の間に広汎なイスラーム的統一をもたらした。この統一の具体的な成果が、強大なイスラーム帝国の出現に他ならないのである。だが予言者以後四代カリフ迄保たれてきた政治の宗教的性格は、ウマイヤ朝に至つて急激に損なわれ、そこにまた古来の世俗的な部族的連帯感情アサビリーヤが頭をもたげることになるのだ。そしてこの連帯感情は、アラブ世界の分極化の最も主要な原因となるのである。

ここでわれわれは少々まわり道をして、ウマイヤ朝後期に特筆すべきこととして、聖戦ジハードの成果がそれ以前に比してきし

ウマイヤ朝後期における政治的変遷の特殊性について

てあがつていない事実注目しよう。事実この点に関しては、先代のアルワリード一世がなした程の対外的成果を、後のカリフ達は一束になつてもあげていないのである。もちろん聖戦ジハードとは本来、宗教的なものである。しかし聖戦ジハードはまた、政治的現象として経済的側面も持つているのだ。とある世俗の民にとつては、これは隣りの部族の財産を狙うよりも遙かに利益のあることだつたのである。⁽²⁾聖戦ジハードに関するヴェルハウゼンの、辛辣だが、示唆的な意見は、ウマイヤ朝後期に逆の意味で通用するのである。「内訌を補修する最良の方法は、対外的発展にあるように思われた。何故ならばこれは、内部の人心の乱れを癒やす直接的な方法だつたのだから。反抗的な諸部族は、聖戦ジハードを通じてイスラームの関心事へと引き寄せられ、それと和解したのだつた。」⁽³⁾ところで飽和状態に達した対外的発展が固い壁にぶつかり、強力なビザンティンとの戦いが一進一退をたどるようになると、これと丁度逆の作用が生じるのである。とにかく対外事情がこのような状態にあるとき、為政者たるものは十分対内事情を整備すべきであつた。しかし生憎なことにイスラーム帝国の内部事情は、悪化の一方を辿つていくのだ。

輝やかしい外征の記録を残したワリード一世の後をついだ、ウマイヤ朝後期初めてのカリフ、スライマーンがまず最初に行なつたことは、インド遠征の指揮官であるアルハッジャージュの従兄弟ムハンマド、あるいはアルハッジャージュの信奉者であり、中央アジアの征服者であるクタイバを罷免することだつた。そしてウマイヤ朝黄金時代の立役者の一人であるクタイバは、スライマーンの即位を嘉としなかつたという廉で、悲劇的な死をとげることになるのだ。⁽⁴⁾

カイス族(ムダル)の権勢がアルハッジャージュにおいて極まつた、⁽⁵⁾ということは周知の事実である。ところですでにアルハッジャージュは他界していたにせよ、その一統、一味の者に反対をうけたスライマーンとしては、彼等の力を即刻弱める必要があつた。カイス族に敵対するにあつて彼は、カイスの宿敵であるヤマン族のヤジード・ブヌルムハッラブといつた人物を登庸し、ホラーサーンの太守という重要な地位に任じているのである。⁽⁶⁾スライマーンはこのような

挙に出ることによつて、自ら部族闘争の騒乱の中に自分を投じてしまつたのだつた。スライマーン以前の時代には、カリフたる者は、いわば専断者として政事を宰領し、臣下の者のいさかいによつて彼の政治が左右されることはなかつた。例えばアブドッリマリクの時代には、かの専横で名の知れたアルハッジャージュですら、宿敵ヤジードを投獄することができなかつたのである。ちなみにヤジードが投獄されたのは、アブドッリマリクの死後なのだ。⁽⁷⁾

カリフたる者が、部族的抗争の中に身を投じなければ安身立命がいかない。これがこの時代の実態であつた。ところで具体的な史実にあたる前にわれわれは、この時代の政治的変遷に影響を与えた、重要な諸要素を抽出してみることにしよう。カリフを頂上にいただきながらも、その下では果してどのような政治的底流が渦巻いていたのだろうか。

ジュルジー・ザイダーンは、時代は遡るが正統四代カリフ、アリーの時代の社会構造を分析して、以下のような系統化を行なつて⁽⁸⁾いる。

- (一) ムダル、ヤマンに代表されるような血族的集團。
- (二) イラク、シリア、エジプト等々の地域的集團。
- (三) 正統派^{スンニー}、シーア派、アルムウタジラ派等々の宗派的集團。

ところでわれわれはこのような集團の区分けを、丁度ウマイヤ朝後期にも適応させることができるだろう。例えばアリーの時代には、バストラはウスマーン派に、クーファはアリー派に、シリアはウマイヤ派、ジャジーラはハリジユ派、ヒジャーズは正統派に所属していたと考えられるのだ。そしてウマイヤ朝は一旦これを権力によつて統轄したものの、たえずこれらの集團の相互対立に悩まされなければならなかつた。イスラーム世界の分極化は、右にあげたような一連の集團の集團感情の発露⁽⁹⁾に従つて着々と度を深めていくのである。

ウマイヤ朝は、一応ムダル、ヤマンの両血族的集團を二つながら自分の支配下におくことができた。しかしスライマーン

ンの例を見てもわかるとうり、ムダル（アルハッジャージュ派）、ヤマン（ヤジード派）の対立を清算することはできず、むしろ次第にこれに攪乱されるような結果となつてしまつたのである。

さらにまたシリアを根城とするウマイヤ朝は、エジプトを手なづけえたものの、イラクとは根強い対立をつづけ、さらにホラーサーン、北アフリカ地域を完全に敵にまわしてしまふことになるのだ。イラク対シリアの対立を解消しえなかつたことが、地域的分極化に著しく拍車をかけているという事実は否めないことなのだ。⁽¹⁰⁾

カリフの神聖度の減少は、多くの宗教的分派の抵抗をさまざまなかたちで妥当化した。シーア派、ハリージュ派のたえざる反抗は、殉教者の数が増すにつれウマイヤ朝の権威、為政にたいする憎悪を人々の間に植えつけていつたであろうことは、想像にかたくないのである。

以上の諸要件に加えてわれわれは、非征服地の民である被護民^{マフリース}の抬頭という事件を重要視せねばなるまい。被護民^{マフリース}とアラブとの関係は、その本質上あい対立するものであつたが、これもまた四代カリフの時代まで、つまり善政がしかれていた間はさして険悪なものではなかつた。⁽¹¹⁾しかしウマイヤ朝、特にアルハッジャージュのイラク大守時代になると、彼の強硬弾圧政策にたいする反撥から、イラク在住のアラブと被護民^{マフリース}の為政者にたいする反感はその極に達するのである。そしてこの地域における被護民^{マフリース}は多く逃亡したり、⁽¹²⁾中央アジア征服に参加することによつてこの難を遁れている。⁽¹³⁾それも不可能な者達は弾圧下に、反ウマイヤのアラブと結託して、ひそかに叛乱の機を窺つていたのである。そして彼等は殆んどあらゆる叛乱に参加していたのであり、事実ウマイヤ朝を倒してアッバース朝を興隆させたのは、これら非アラブ人だつたといつても過言ではないのだ。⁽¹⁴⁾アラブと非アラブ被護民^{マフリース}との結婚、これがウマイヤ朝の命とりとなり、またアッバース朝の体制を根本的に規制するものとなるのである。

註

- (1) 'A. M. Mājid, "At-ta'rikh-s-siyāsi li-d-dawlat-l-'arabiyyah", vol. 2, p. 341.
- (2) Al-Balādhuri, "Kitāb futūh-l-buldān" vol. 2, p. 128.
- (3) J. Wellhausen, op. cit. p. 23.
- (4) At-Tabari, "Ta'rikh-t-Tabari" 2, 1273. Ibn al-'Athir, "Al-kāmil" vol. 4 p. 137. 以後 I. A. K. 4 参照
- (5) At-Tabari, op. cit. 2, 1268.
- (6) At-Tabari, op. cit. 2, 1306, Al-Jahshiyari, "Kitāb-l-wuzarā' wa-l-kuttāb", p. 49.
- (7) At-Tabari, op. cit. 2, 1138~1144, 1182, I. A. K. 4 pp. 96, 106.
- (8) J. Zaidān, "Ta'rikh-t-tamaddun al-islāmi", vol. 4, p. 77.
- (9) 'Asabiyyah' に関して種々の定義があるが、著者はこの語を最も一般的な意見で用いた旨を記しておく。Ibn Khaldūn, "Al-muqaddimah" 参照。
- (10) 'A. H. Kharbūri, op. cit., 参照。
- (11) M. B. Sharif, "As-širāt bainā-l-mawālī wa-l-'arab", p. 24.
- (12) Ibn Qutaibah, op. cit., pp. 31~2.
- (13) Ibn Qutaibah, op. cit., vol. 2, pp. 59~60.
- (14) Hamzah al-'Isfahāni, "Ta'rikh sinī mulūk-l-'ard wa-l-'anbiyā' p. 216.

三、分極化の過程

第二節であげたような分極化作用は、その一々の要素をとりあげるならば、すでにスライマーン（回教曆九十六―九十九年、以後年号すべて回教曆）の時代以前に出つくしていた。しかしこの時代になると一々の単独の要素は作用力を強め、あるいは他の諸要素とより緊密に融合しあつて、一種の化学変化を起し、ますます支配王朝の基礎をあやうくさせているのである。

スライマーンの時代以前にも、すでにムダル、ヤマンの対立は存在した。しかしこの対立の渦中に直接身を投じなければならなかつたのは、ウマイヤ朝において彼を嚆矢とするのである。彼の統治する帝国の奥底には、これまでのべてきたよ

ウマイヤ朝後期における政治的変遷の特殊性について

うな破壊的要素が不気味にうごめいていた。しかし彼は、何等効果的な政策をうちだす訳でもなく、もつぱら世俗的な快樂の追究にいそんでいたのである。彼の行状については、ダマスカスの人々の口の端にのせられていたという流行の言葉が、よくその実態を告げてくれるであろう。「アルワリードは芸術愛好家、ハレムと贅沢好きはスライマーン、ウマルの敬虔さは類もなし。」⁽¹⁾

スライマーンはまた大食いであつた。⁽²⁾ 彼は丁度没落前のローマ貴族たちのように、政事などはそつちのけに、もつぱら王朝の安泰の基礎までも喰らいかけていたのである。

スライマーンの後を継いだウマル・ブン・アブドゥルハジーズ（九十九―百一年）は、殆んどすべての歴史家が認めているように、ウマイヤ朝第一のカリフだつた。⁽³⁾ 家臣の強い徳憑があつたにせよ、スライマーンは死の床で最も優れた人選を行なつたことになるのだ。⁽⁴⁾ 実際彼は、彼がカリフに任じられなかつたならば、ウマイヤ朝の没落はより時期を早めたのであろうと推測させるほど善政をしいた。「彼は五代目の正統カリフである」⁽⁵⁾ という評価を初めとして、その人格的特性にもとづく善政については、もろもろの歴史家が至るところで言及している。

彼はまず、公金着服の廉でスライマーンの寵臣ヤジード・ブヌルハムハッラブを罷免した。⁽⁶⁾ さらに後任の太守達を任命するにあたつて、部族的対立などには眼をむけず、たゞ公正なる人物という規準にのつとつた彼の人選は、⁽⁷⁾ いわゆる分極化作用を阻止する上で大いに力があつたのである。さらにウマルは、アルハッジャージュの代から行なわれていた、イスラーム改宗者から人頭税をとりあげるといふ制度を完全に廃止した。この際の彼の言葉、「アッラーがムハンマドを遣わしたのは、イスラーム布教のためであつて、割礼をほどこすためではない、」⁽⁸⁾ という彼の言葉には、賢帝の面目躍如たるものがあるのだ。新回教徒からの税金徴収は多くの叛乱の口実となつていたが、この新政令のおかげでウマルの治世に

は、ペルシャ人、トルコ人、⁽⁹⁾インド人、⁽¹⁰⁾ベルベル人の間から多くの新改宗者がでていたのである。その他彼の行なつた租税面での善政に関しては、アルハヤマンの地租の廢止、⁽¹²⁾ナジュラーンの人頭税の大巾輕減等々、⁽¹³⁾例は枚挙にいとまないのだ。

彼の寛仁大度はたしかに民心を和げた。しかしこゝにいささか問題がない訳でもない。例えばH・I・ハッサンの次のような指摘は、今後徹底的に究明する必要があるだろう。⁽¹⁴⁾「ウマルは多くの改革を行なつた。しかしこれらはイスラームのために行なわれたのであつて、⁽¹⁵⁾国庫のために行なわれたのではない。」ウマルは、新回教徒から人頭税をとりたてた廉でホラーサーンの大守アルハジャッラーフを罷免している。⁽¹⁶⁾だが彼のエピソードは、当時の經濟状況をいささかなりとも反映していないだろうか。彼は任地を立ち去る際に次のようにいつている。「ホラーサーンの民よ。私は今着ているこの着物を着、この騾馬に乗つて着任した。そして私がこの地で得たものといえは自分の刀の刀飾りだけなのだ。」事実彼が連れ去つたのは自分の老馬と、一頭の老いばれ騾馬のみだつたというのである。アルハジャッラーフのような正直者が、改宗者に人頭税をかけたのは、あるいは国庫のためをおもんばかつてのことではなかつたのだろうか。彼の清貧は、こうしたわれわれの想像をかきたててくれるに十分なのだ。ウマルの時代は、アブドゥルマリクとアルハッジャージュの時代よりも繁榮していたという史家もある。⁽¹⁷⁾だがウマルが、国家収入の減収をさけるため、アラブやその他の回教徒に公地を売りつけている事実もあるのだ。⁽¹⁸⁾とにかくウマル自身は質朴を重んじ、国庫よりの支出を極端に制限している。⁽¹⁹⁾しかしこのようなことは、とにかく後のカリフ達には不可能なことなのだ。彼の死後、その税制改革がたちどころに反古に附されたことを見ても、ことがそれ程簡単ではなかつたことが想像できるだろう。

彼はアリーを公式に誹謗することを止め、⁽²⁰⁾ハリリジュ派対策にしても、彼等が流血沙汰を起すまでは処罰しなかつた。⁽²¹⁾またあらゆる不正を忌み嫌う彼は、キリスト教徒に対する聖戦^{ジハド}以外は、すべて戦いを禁じているのである。⁽²²⁾有徳な彼の為

政は、一般の民衆の心の渴きを癒す一服の清涼剤だった。しかし彼の改革は、奢侈に馴れ親しんだ王朝一族から当然強い反撥を浴びうる性質のものだった。事実アブドゥルマリク一家が主流を占める当時のウマイヤ朝の中で、傍系のウマルの即位を喜ばぬ者がいたことは明らかであり、特にヒシャームはその最たる者だったのである。⁽²³⁾「ウマルは何の権利も資格もなくカリフの地位に即いた。彼がカリフに相応しい価値を示したのは即位後のことである。」⁽²⁴⁾このような言葉がささやかれるほど、彼の個人的勢力は小さかつたのだ。

彼の在位期間は余りにも短かつた。即位後二年半にして彼は病死することになるが、その死因としては毒殺説もあげられるのである。⁽²⁵⁾二年半という期間は、大事をなすには余りにも短い期間である。しかしこの短期間に急速に名声をあげていく非のうちどころない人物は、カリフの地位を狙う世俗の徒にとつて、目の上のこぶであつたことは想像に難くない。宗教的徳性にもとづく格調高い政治を行なつて、国内の精神的統一をはかつた名君が、元来同じ連帯感情に属すべき親族から毒殺される。ウマイヤ朝はウマルの時代以後、崩壊の坂道を一気にかけおりにすることになるのだ。イブン・ハルドゥーンのように、一たび王朝が全盛期をすぎ、そこに老衰の種子が蒔かれると、これを克服することは非常に困難なことなのだ。ウマルの内政重視政策にもかかわらず、彼の治政の間にもハリリジュ派シューザブが叛を起し、⁽²⁶⁾アッバース朝宣伝の秘密行動が開始されていること⁽²⁷⁾をみても、この時代の破滅的状况は十分納得されうるだろう。

容易に想像しうることながら、ウマルの死後事態は悪化の一途を辿つた。彼の後を継いだのはヤジード二世(百一―百五
年)であるが、「彼は遊び人で、サッラーマとハッバーバという二人の奴隷女の恋の虜となつた。(中略)ヤジードの治世は長くなかつたが、この間何の征服もなく、高く評価されるべき事は何もなかつたのだ。」⁽²⁸⁾こういつた彼の人柄は、その詩の中にも現れている。「この世厭ましと誣るは戯れよ。所詮この世は快樂のもの。」⁽²⁹⁾

ヤジード二世が即位後すぐに直面したのは、ヤジード・ブヌルムハッラブの叛であつた。このカリフの妻はアルハッジャードの娘であり、こうした関係からヤマン派のヤジードとカリフとの関係は険悪であつた。⁽³⁰⁾カリフは即位直後ヤジード追究の挙に出るが、これを察したヤジードはすぐにバスラへ赴き、⁽³¹⁾その地の民を使喚して決死の叛乱を企てるのである。⁽³²⁾叛乱の火の手が余りに大きいことを伝えきいたカリフは、すぐに赦免の書簡を送るが、ことはすでに抜きさしならぬところまで発展していた。「アッラーの書と、予言者の慣行の名において、シリアの民との聖戦に参加せよ。」⁽³³⁾ヤマン派の策士ヤジードは、聖戦^{ジハード}という大義を唱えて人々の宗教心を唆かし、イラクの民の反シリア感情をかきたてているのである。叛徒の中には宗教的分派のムルジア派もいたことを勘案すれば、⁽³⁴⁾彼は血族、地域、宗教的連帯感情^{アサビエヤ}のすべてを利用していたことになるのだ。マスラマのような名将がこの乱を早目に鎮圧しなかつたならば、事態は最悪の結果を招きかねなかつたのである。⁽³⁵⁾

彼は無力で、政治に無関心であり、事をなすがまゝに任せておいた。⁽³⁶⁾例えばハーリジュ派のシューザブが、ウマル在世中に叛旗をひるがえしながらも、実際行動を起したのは彼の死後であつたという事実を見ても、容易にヤジードの無策の程が知れるのである。⁽³⁷⁾彼の短い治世の間に、事実前述したように、すべての種類の連帯感情^{アサビエヤ}が彼に敵対し、具体的な行動をとつているのだ。幸いにして彼の身边を脅すまでには至らなかつたが、帝国の分極化は次第にテンポを早めて行くのである。こうした状況の中でヤジードは、恋人ハッバーバの死を悼み、自分もその後を追うことになるのだ。⁽³⁸⁾

ヒシャーム(百五―百二十五年)の治世は先三代に比して長く、またその有能さにかけてはウマイヤ朝カリフ三指の中に入るとされている。⁽³⁹⁾しかしこの有能なカリフも、崩壊の坂を下る帝国を支えきけることはできなかつた。この時期に特長的なことは、辺境の地域がようやく騒然としてきたことであらう。王朝の権力は徐々に辺境から侵されてくるのである。

もちろん中心部でも、いくつかのハリジュ派の乱があり、失敗に帰したがシリア派のザイド・ブン・アリー・ブヌルリフサインがクーファで乱をおこし、⁽⁴⁰⁾これがきつかけとなつてシリア派は、これ以降大きな叛乱をまきおこすことになるのだ。だがとりわけ悲観的な現象は、王朝内で人々が、互いに他に対する信頼感を極度に失なつてしまつたことにあるだろう。例は数多いが、ヒシャーム自身がまずこつた不信感の虜になつてゐるのだ。聡明だが、強欲で疑い深い⁽⁴¹⁾という彼の評価はそのまゝ、この時代において聡明なカリフが、どのような処世法をとらねばならなかつたかを示しているようである。例えば彼はカイス族のイラク太守、ウマル・ブン・フバイラが次第に不遜な態度をとるのを見て、後任にヤマシ派のハリドリルカスリーを任じ、⁽⁴²⁾前任者を殺している。⁽⁴³⁾そしてまたハリドリの名声があがつてくるのを見ると、再びムダル派のユースフ・ブン・ウマルを用いているのだ。ハリドリもお決まりのごとくまず投獄され、⁽⁴⁴⁾その後後述するやうに前任者と同じ運命を辿ることになるのである。一種族の抬頭を押えるために、他の種族を用い、その抬頭を押えるために先の種族を用いるといつた政策は、結局到るところに不信を植えつけ、あげくのはてには為政者の息の根をとめてしまふことをヒシャームは知らなかつたのだろうか。⁽⁴⁵⁾

例えばホラーサーンでは、ヒシャームの代に何度かの遠征が行なわれているが、それと同時に中央の手の届かぬこの地で、ヒシャームの政策の破綻がすでにあらわれているのだ。ムダルとヤマンはこの地でたがい激しく対立し、⁽⁴⁶⁾種々の紛争を惹き起しているのである。⁽⁴⁶⁾そこに改宗者にたいする徴税反対を唱える、ソグドとブハーラーの民が乱を起し、⁽⁴⁷⁾アラブがこれにかまけている間に突如として、トルコマーンの武將ハーカーンがこの地を襲うのである。⁽⁴⁸⁾そこに引きつづきハリジュ派のハリス・ブン・スライジュが⁽⁴⁹⁾叛き、イスラーム始つて以来のこととミューアがいつているやうに、⁽⁵⁰⁾このトルコマーン武將とアラブのハリジュ派首領は、互いに手を結んでホラーサーンを脅やかしているのだ。かくしてホラーサーンは最も統治困難な地となり、次々と太守を更迭しても効果なく、ついにウマイヤ朝打倒のための叛徒の温床となつて

しまふのである。

シンドの地でも、アラブ大守は当地のムスリム王を些細な理由から殺害し⁽⁵¹⁾、イラクに直訴に赴いたその弟をも殺してしまうという暴挙に出て、結局大叛乱を惹き起す破目となり、それ以後この地も状勢險悪になつてゐるのだ。

一方アラブは、毎年のようにビザンティン遠征に出かけていたがさしたる戦果もなく、それでも百八年にはカイサーリヤ⁽⁵³⁾、百十年にはサルマを占領したりして氣勢をあげていたが、百二十二年名将バツタールが斃れるに及んでとみに劣勢となつてきた。またアルメニアの地におけるジャッターフの敗死⁽⁵⁶⁾、後任マスマの戦死等⁽⁵⁷⁾、アラブの将軍が敗北を重ねており、次第に憂色が濃くなつてくるのだ。

だが何にもましてアフリカの事態はより險悪だつた。エジプトではコプト人が約十五年間にわたつて抵抗をつづけ、ハンガラ・ブン・サフワーンがようやくこれを平定してゐるのである⁽⁵⁸⁾。だがウマイヤ朝が最も手を焼いたのはイフリーキヤにおけるハーリジュ派ベルベル人の大叛乱であろう。新改宗者にたいする人頭税課税反対に端を發したこの乱は⁽⁵⁹⁾、北アフリカ沿岸地方の民の大々的な支持をえて發展し、ウマイヤ軍は敗北に敗北を重ねた末、ようやく各地の正規軍をこの地に投入して乱を鎮圧することができたのだつた。時のスペイン大守ウクバ・ブヌルハッジャージュは、フランクに對する大攻勢を準備していたが、この乱の平定に赴いたためにフランク征討の機を失したといふことは、有名な事實である⁽⁶⁰⁾。

スペインにおいても、ヒシャームは熱心にフランク攻撃を画策したが、アンバサが百七十年大遠征を試みた後は、この地のアラブ間に件の内輪もめが起り⁽⁶²⁾、以後アラブ側は劣勢に立たされるのである。百十三年アブドゥッラーフは、トゥールとポワチエ間でシャルル・マルテルの軍に敗れ敗死しており、その後のウクバの進攻案も先のような事情で沙汰やみになつてゐるのだ。

以上のようにヒシャームの治世は、一見安泰に見えながら、その実イスラーム帝国が外辺から崩れ去つて行く時代だつ

た。この間有能な彼は、まず大過なくカリフの務めを果したが、彼とてもそれ以上のことはなしえていないのである。フアン・フローテンは、ウマイヤ朝のハリリジュ派對策について次のようなことを述べているが、この言葉は他の一般的な側面においてヒシャームの統治にも妥当するのではなからうか。「ウマイヤ朝人士は、この精神的な反抗を根絶するために必要な思想的力を頼みにすべきであつた。しかしハリリジュ派の反抗とその新たな要求にたいして、彼等のしたことはたゞ反抗者に鬭争を挑むだけのことだつた。」⁽⁶⁴⁾新しい、効果的な方策は何一つ立案、実施を見ないまゝ、事態はますます危機の度を深めていくのである。

ヒシャームの後のワリード二世(百二十五―百二十六年)以降は、内訌の時代である。さまざまな不和が一点めざして、つまりウマイヤ朝崩壊をめざして押し寄せたのがこの時代だといえるだろう。

ワリード二世は、ヒシャームが自分にカリフ職を譲らぬだろうという故ない疑惑を持つており、⁽⁶⁵⁾彼を嫌つてもつぱら酒色に耽つていた。⁽⁶⁶⁾そしてヒシャームの死の報を聞くや欣喜雀躍し、ただちに彼の親族、寵臣の許に使を派し、彼等の財産を奪い取つていたのである。⁽⁶⁷⁾かくして彼は身内の者の集団感情を完全に裏切つてしまつたのだ。おまけに彼は、自分の二人の息子をすぐにカリフの候補者として指名しているが、このような愚挙は他の誰もが行なつていなかったことなのである。

ついで彼はカイス族のユースフの要請に従がつて、前述のヤマン派ハリリドの身柄を金で売り渡し、⁽⁶⁸⁾結局ハリリドは殺されてしまうが、この行動によつてヤマン派の強い憎しみを買つてしまうのだ。また彼は神聖なカアバ聖域に建築家を送り、そこに世俗的な快樂のための施設を建てようとする暴挙をあえてし、⁽⁶⁹⁾結局宗教的な連帯感情をも失つてしまうのだ。そして先代ヒシャームの二人の息子が惨殺されるに及び、ヤジード・ブヌルッワリードは、親族、ハリリド家の者、ヤ

マン派の連中の強い支持をうけて叛を起し、ワリード二世を弑して自らカリフの地位につくのである。⁽⁷⁰⁾

事情は如何なるものであつたにせよ、親族を殺してカリフの地位に昇つたヤジード三世（百二十六年—同年）が、すでに王朝全土を支配しきれなくなつていたことは想像に難くあるまい。彼はもつぱらヤマン派の勢力に頼つていたが、ムダルの面々がこれを黙認しておく訳がなかつた。ヤマン対ムダルの戦いは、ついにカリフをも陥し入れる程深酷になつてきたのだ。

彼の即位の直後に、ワリード二世の報復を唱えてヒムスの民が叛いた。⁽⁷¹⁾ それと同時にキンナスリオン、ヨルダン、パレスティーンで叛乱が起き、アッバース朝の勢力も着々と拡がつていたのである。⁽⁷²⁾ イラクの姿勢も險悪で、有徳有能な大守アブドッリラーフ・ブン・アブドッリルアジーズが手を焼く許りの状態が続いていた。⁽⁷³⁾ またホラーサーンではムダルーヤマン対立がさらに激化し、前者のナスル・ブン・サイヤールが一時この地を制覇し、独立の構えを見せていた。⁽⁷⁴⁾ しかしこの地にはトルコから前出のハリジュ派が姿を現わし、⁽⁷⁵⁾ マルウにはアッバース朝の拠点が確保されているのだ。⁽⁷⁶⁾ 国内はこのようなにして麻の如く乱れ、ついにヤジード最大の強敵、これもまた彼の親族のマルワーン・ブン・ムハンマド・ブン・マルワーンが、ワリード二世の報復を理由に叛旗をひるがえすのだ。⁽⁷⁷⁾

彼はマルワーンに大中の譲歩を行ない、マルワーンと和平するが、その直後に病に斃れ、即位後約半年で他界してしまふのである。⁽⁷⁸⁾ そして彼の死因については、弟イブラーヒームが毒をもつたという、信ずべき説も存在することを忘れてはなるまい。⁽⁷⁹⁾

ヤジード三世の死後、弟イブラーヒーム（百二十六年—百二十七年）はダマスカスで即位するが、⁽⁸⁰⁾ この報を聞くとやマル

ワーンは、すぐに兵を首都に進攻させている。そして即位後僅か数ヶ月でこの新カリフも、親族である軍事のヴェテラン、マルワーンによつて弑されてしまうのだ。⁽⁸¹⁾

度重なる親族殺人の結果、ウマイヤ朝の土台は完全に崩れ去つてしまつた。軍事的才能あり、困難にも良く耐えうるといふので驢馬^(ヒマール)と揮名されたマルワーン二世(百二十七年—百三十二年)にとつても、事態は余りに悪化しすぎていた。百二十七年マルワーン即位のその年には、所もあろうクーフアで、アッバース朝カリフを名のるアブドゥッラーフ・ブン・ムアーウィヤが叛いているのだ。⁽⁸³⁾ 一方ヒムス、ゴータ、パレスティーン⁽⁸⁴⁾あるいはキンナスリーン⁽⁸⁵⁾でも叛が起き、前述のハリジュ派アルリハリスはマルウを占拠していた。またスペインではムダルー—ヤマンの対立が極度に悪化し、ホラーサンでは同じ部族対立の虚をついて百二十九年、アブー・ムスリムが初めてアッバース朝の黒旗を公然となびかせ、その後直ちにマルウを占領しているのだ。⁽⁸⁸⁾

マルワーンの前には、今や宗教的、地域的、血縁的、あるいは人種的の如何を問わず、あらゆる敵が存在した。そしてこれらの敵は、平定し了せるには余りにも数多く強力だつた。マルワーンがハツラーンでハリジュ派征討を行なつている間に、彼の頼みの綱だつたホラーサン大守ナスルはこの地を追われて病死し、この間にアッバース側はカフタバがライイ、イスパハーンを陥してイラークまで侵入しているのだ。⁽⁹⁰⁾ 不幸にしてカフタバは戦死したが、アッバース側は首尾よくクーフアを陥し入れて了つたのである。

クーフア占領後アブリル⁽⁹¹⁾アッバースはすぐに地下から姿を現わし、彼に忠誠の誓いがなされて、ついにアッバース朝が誕生することになるのだ。

一方ザーブでは、十二万の大軍を擁するマルワーンが、僅か三万五千の兵に大敗を喫しているのである。多年にわたる

ウマイヤ朝カリフ達の失政から、彼にたいする連帯感情は完全に失なわれてしまい、彼のために戦わんとする者は殆んど
いなくなつてしまつたのである。⁽⁸²⁾

ウマイヤ朝最後のカリフ、マルワーンは戦い、戦つてついに力尽き、上エジプト、ブーシールで戦死し、かくてこの王
朝も百三十二年に終焉を告げるのである。⁽⁸³⁾

註

- (1) W. Muir, "The Caliphate: Its Rise, Decline and Fall" p. 376.
- (2) Al-Mas'ūdī, "Murūj-dh-dhahab" vol. 3, pp. 184~5.
Ibn at-Tabātibā, "Al-fakhrī" p. 128.
- (3) Al-Mas'ūdī, op. cit., vol. 3, p. 193, Ibn at-Tabātibā, op. cit., p. 129.
- (4) I. A. K. 4 p. 152.
- (5) As-Suyūfī, "Tarīkh-l-khulafā'" p. 227.
- (6) At-Tabarī, op. cit., 2, 1350~2, I. A. K. 4 p. 157.
- (7) J. Wellhausen, op. cit. p. 269.
- (8) At-Tabarī, op. cit., 2, 1354.
- (9) I. A. K. 4, p. 157.
- (10) 'A. M. Mājid, op. cit., vol. 2, p. 265.
- (11) Al-Balādhurī, op. cit., vol. 1, p. 273.
- (12) Al-Balādhurī, op. cit., vol. 1, p. 88.
- (13) Al-Balādhurī, op. cit., vol. 1, p. 80.
- (14) この問題については例を Van Vloten, J. Wellhausen 両者の意見の相違等々先例が多い。
- (15) H. I. Hassan, op. cit., vol. 1, p. 328.
- (16) At-Tabarī, op. cit., 2, 1353~5, I. A. K. 4 pp. 157~8.
- (17) J. Wellhausen, op. cit., p. 306.
- (18) J. Wellhausen, op. cit., p. 281.
- (19) Ibn 'Abd-l-Ḥakam, "Sirah 'Umar bn 'Abd-l-'Aziz" pp. 45~46.
- (20) I. A. K. 4 p. 154.
- (21) I. A. K. 4 p. 155.
- (22) Al-Ya'qūbī, op. cit., vol. 2, p. 302.
- (23) I. A. K. 4 p. 153.
- (24) Al-Mas'ūdī, op. cit., vol. 3, p. 205.
- (25) J. Wellhausen, op. cit., p. 311, I. A. K. 4 pp. 156~7.
- (26) At-Tabarī, op. cit., 2, 1347~9, I. A. K. 4 pp. 155~7
- (27) At-Tabarī, op. cit., 2, 1358, I. A. K. 4 p. 159

- (80) Ibn Ṭabāṭabā, op. cit., p. 131.
- (81) Al-Mas'ūdī, op. cit., vol. 3, p. 207.
- (82) I. A. K. 4 p. 161.
- (83) Aḡ-Ṭabarī, op. cit., 2, 1359, I. A. K. 4 pp. 160~1.
- (84) Aḡ-Ṭabarī, op. cit., 2, 1379, I. A. K. 4 p. 167.
- (85) I. A. K. 4 pp. 171~7.
- (86) Aḡ-Ṭabarī, op. cit., 2, 1400.
- (87) I. A. K. 4 pp. 169~70.
- (88) J. Wellhausen, op. cit., p. 323.
- (89) I. A. K. 4 pp. 155~7, 166, M. J. D. Surūr, "Al-ḡawāt-s-siyāsīyah fī-d-daulat-l-'arabīyah-l-islāmīyah" p. 125.
- (90) I. A. K. 4 p. 192.
- (91) Al-Mas'ūdī, op. cit., vol. 3, p. 223.
- (92) I. A. K. 4 pp. 231~3.
- (93) Ibn Ṭabāṭabā, op. cit., p. 132.
- (94) I. A. K. 4 p. 192.
- (95) W. Muir, op. cit., p. 395.
- (96) I. A. K. 4 pp. 235~8.
- (97) I. A. Al-Adawī, "Al-'Umawīyūn wa-l-Bizantīyūn" p. 306.
- (98) I. A. K. 4 pp. 193~4.
- (99) I. A. K. 4 pp. 202~3.
- (100) I. A. K. 4 pp. 204~5.
- (94) I. A. K. 4 pp. 218~9. G. Van Vloten, "La Domination Arabe, le Shī'tisme et les Croissance Mesianique sous le Khalifat des Omayyades" tr. into Arabic by H. I. Hassan and M. Z. Ibrāhīm pp. 60~8.
- (95) W. Muir, op. cit., pp. 403~4.
- (96) W. Muir, op. cit., p. 405.
- (97) Al-Yā'qūbī, op. cit., vol. 2, p. 317.
- (98) I. A. K. 4 p. 199.
- (99) I. A. K. 4 p. 205.
- (100) I. A. K. 4 pp. 248~9.
- (91) I. A. K. 4 p. 207.
- (92) W. Muir, op. cit., p. 406.
- (93) 'A. M. Mājid, op. cit., vol. 2, p. 288.
- (94) I. A. K. 4 pp. 222~4.
- (95) J. Wellhausen, op. cit., p. 343.
- (96) I. A. K. 4 p. 197.
- (97) 'A. M. Mājid, op. cit., vol. 2 p. 307.
- (98) I. A. K. 4 pp. 214~5.
- (99) G. Van Vloten, op. cit., p. 75.
- (100) Ibn Ṭabāṭabā p. 134.
- (98) Al-Mas'ūdī, op. cit., vol. 3, p. 225.
- (99) I. A. K. 4 p. 258

- (69) I. A. K. 4 pp. 262~3.
 (69) Al-Ya'qūbī, op. cit., vol. 2, p. 333.
 (70) Al-Ya'qūbī, op. cit., vol. 2, pp. 333~4.
 (71) I. A. K. 4 p. 270.
 (72) Al-Ya'qūbī, op. cit., vol. 2, p. 335.
 (73) I. A. K. 4 p. 274.
 (74) I. A. K. 4 pp. 274~6.
 (75) I. A. K. 4 pp. 276~7.
 (76) I. A. K. 4 p. 277.
 (77) I. A. K. 4 p. 278.
 (78) I. A. K. 4 p. 278.
 (79) Al-Ya'qūbī, op. cit., vol. 2, p. 336.
 (80) I. A. K. 4 p. 278.
- (81) I. A. K. 4 p. 283.
 (82) As-Suyūnī, op. cit., p. 254.
 (83) I. A. K. 4 pp. 284~5.
 (84) I. A. K. 4 p. 286.
 (85) Al-Ya'qūbī, op. cit., vol. 2, p. 338.
 (86) I. A. K. 4 pp. 290~1.
 (87) Al-Ya'qūbī, op. cit., vol. 2, pp. 341~2.
 (88) I. A. K. 4 pp. 309~10.
 (89) I. A. K. 4 p. 317.
 (90) I. A. K. 4 p. 320.
 (91) Al-Ya'qūbī, op. cit., vol. 2, p. 345.
 (92) I. A. K. 4 pp. 327~9.
 (93) I. A. K. 4 pp. 330~3.

〈付記〉

紙数の関係上本稿では、特にウマイヤ朝後期の政治的推移の骨格のみを略述するのみに止まった。階級構造上の変化、その文化的反映等々の問題を通して、この時代の政治的変遷の法則性を追究しようというのが筆者の真意であるが、以後はのちの機会に譲りたい。